

菅江真澄『すみかの山』から探る近世の雪形利用の実相

—— 真澄の図絵と現代の景観との対比から ——

太 田 原 潤

OTAHARA Jun

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程

【要旨】『すみかの山』の記載内容と図絵を詳細に検討し、真澄が青森県八甲田山の雪形を描いた場所と日の特定を試みたところ、1点は寛政8年4月21日（1796年5月27日）に現在の青森市原別と八重田から、もう1点は同年5月1日（同年6月6日）に青森市駒込から描いたものと推定することができた。

併せて現代における八甲田山の雪形の見え方を継続的に観察、記録するとともに、青森市東部で聞き取り調査を行ったところ、真澄が記録した「種まきオッコ」⁽¹⁾、「蟹のはさみ」、「牛の首」の三種の雪形は、現代においてもほぼ同じ時期に見ることができることが確認された。また、聞き取り調査においては駒込と原別において雪形の話を書くことができたが、奇しくもそこは真澄が図絵を描いた場所に重なる地区であった。これらの地区では、真澄が記録した雪形が現代に至るまでよく伝承されていることが確認されたが、「種まきオッコ」に限ってはどこでも聞くことはできなかった。

18世紀の真澄の記録と現在見ることができる雪形を比較すると、真澄が記録した雪形の出現順と農作業との対応関係については、真澄が聞き取りをした時点において既に齟齬が生じていたであろうことも確認できた。このことは、真澄が記録した頃に雪形と農作業の具体的な関係性が語られていたとしても、細部では必ずしも実態に即したものはなっていなかったことを示している。雪形が現れるのは田植えの頃という大枠の目安としては機能していたものの、具体的な作業の目安としてまでの期待は大きくはなかったものと考えられる。

一方、現在の農作業においては雪形を目安とする必要性は全くないにもかかわらず、駒込地区においては、雪形は今も田植えの時期に意識される存在であることも確認できた。八甲田山の雪形は駒込地区の水源地が可視化されたものでもあり、具体的な作業の目安とはされないまでも、田植えの頃の心づもりを促す存在であり、水源地が確保されていることの安心感につながる存在でもあった。

The Realities of Early Modern Use of the Yukigata (Snow Forms)
in Sugae Masumi's "Sumika no Yama"
—— The Comparison Between Masumi's Illustrations
and Contemporary Landscapes ——

Abstract : After analyzing the written records and illustrations in "Sumika no Yama" and attempting to determine the locations and dates Masumi drew the Yukigata (Snow Forms) found on Mount Hakkoda in Aomori Prefecture, it was possible to conclude that it was likely that one had been drawn on May 27, 1796 from what is now the area around Harabetsu and Yaeda in Aomori City, and another on June 6, 1796 from the area around Komagome in Aomori City.

Furthermore, upon observing and recording from afar the Yukigata on Mount Hakkoda over a period of time and conducting interviews in the eastern areas of Aomori City, it was possible to confirm that three Yukigata that Masumi recorded—The Old Man Sowing Seeds, The Crab's Pincer, and The Cow's Head—were still visible on roughly the same dates even today. It was also possible to hear stories about Yukigata during interviews conducted in the areas of Komagome and Harabetsu. Coincidentally, these districts overlapped with the areas Masumi drew in his illustrations. It was noted that the Yukigata that Masumi recorded had been transmitted to modern times in these districts, with the exception of The Old Man Sowing Seeds.

When comparing the Yukigata in Masumi's records from the 18th century and those that can be seen today, it was possible to confirm that the time of the year the Yukigata that Masumi recorded appeared did not always correspond with the time farmwork began even back when Masumi conducted interviews. This indicates that even though stories may have been told of the relationship between the Yukigata and farmwork when Masumi made his records, the details had not always reflected reality. It can be considered that although the appearance of the Yukigata functioned as a general guide for planting season, it was not expected to be a signal for farmwork to begin.

Nevertheless, although modern farmwork does not rely on using Yukigata to decide the best times for certain tasks, it was possible to confirm that farmers still take the Yukigata into consideration during the planting season in the area around Komagome. The Yukigata on Mount Hakkoda show the water sources for the area of Komagome, and although they are not used as a signal to start specific tasks, they still exist to urge farmers to prepare for planting season and to bring people peace of mind knowing their water sources are still intact.

はじめに

かつて人々は、春先の残雪の形を動物や人の姿に見立て、農作業などの目安としたと言われる。見立てた形を今日では「雪形」と言うが、その語の初出は昭和初期である⁽²⁾。それ以前は定まった呼称は見られないものの、内容的に雪形のことを指していると思われる記録は近世まで遡る。

雪形の記録は18世紀初頭から見られるようになるが、最初期のものは句集や紀行文であり、以後も鑑賞対象として取り上げられる傾向が見られた。一方、農耕適期などを記した在地の農書はそれ以前からあるにもかかわらず、そこに雪形の記載は見られない。それらについては別稿に譲るが⁽³⁾、雪形が雪国における農作業の目安として必要なものであったとすれば、在地の農書に記載がないのも不可解である。雪形が農作業と関係するものであるならば、実態としてどの程度の目安となり得たのかということについても、これまで論じられることはなかった。

また、一般的に暦の普及とともに自然暦の利用は衰退傾向にあり、雪形が本来持っていた役割も時代とともに薄れてきたと思われがちだが、その点についても具体的に論じられることはなかった。

近世にもそれなりに雪形に関する記録はあるが、絵入りの記録は少なく、記録された場所や時期が特定できる例となると限定的である。菅江真澄が寛政8年(1796)に青森市周辺を歩いた際の日記『すみかの山』もその一つであり、そこには八甲田山の雪形の絵が2葉挿入され、3種の雪形についての記載がある。真澄の記録は自らの直接的な見聞で記されており、そこには時間と場所の情報も含

まれる。それに基づいて当時の雪形認識を再構成することも可能となり、同じ時期、場所で現代との比較を行うこともできる点において、『すみかの山』は稀有な資料とすることができる。

本稿においては、真澄の記録と現在の実景との対比から、近世の雪形利用の実相に迫ってみたい。

I 菅江真澄と『すみかの山』

(1) 菅江真澄

菅江真澄は宝暦4年（1754）、三河国に生まれた。本名は白井英二とされ、秀超、秀雄、菅江真澄などと称した。

国学や本草学を学び、天明3年（1783）に三河を発ち、信濃、東北各地、蝦夷地を旅して、その見聞を日記、地誌などとして残した。現在、そのうちの77冊12帖が「菅江真澄遊覧記」として国の重要文化財に指定されている。

真澄が現在の青森県域に初めて入ったのは天明5年（1785）である。何度か出入りしつつも、弘前藩の採葉御用手伝いも務めたが、何らかの嫌疑をかけられその任を免ぜられ、身柄を拘束されたのではないかと推測されている（内田・宮本1972）。享和元年（1801）に津軽を去るまでに16冊の日記が編まれ、『すみかの山』もそのうちに含まれるが、秋田領内での日記に比べて津軽領内での日記が断片的だったり原本が失われていたり、採葉御用を解かれた後の2年間は日記を書いた形跡がないのはそうした嫌疑が影響したとも考えられている。

津軽を去った真澄は秋田に住し、領内の地誌作成にも関わり多くの著作を残した。菅江真澄と名乗ったのは文化7年（1810）からで、文政12年（1829）に秋田領内で没した。

(2) 『すみかの山』

『すみかの山』の題は青森県の八甲田山にちなんでつけられたものである。八甲田山にそのような別称があるわけではないが、真澄はかねてより、「鳥がなく 東のくにの陸奥の小田なる山にこがねありとは（万葉集卷十八 大伴家持）」の歌で知られる、こがねが出る「みちのくの小田（こだ）なる山」に関心を抱いており、「耕田の岳・耕田山」と呼ばれる八甲田山がそれにあたるのではないかと考え、「みちのくの栖家の山の黄金鳥かくとしらふの名に残る雪（大納言政頼）⁽⁴⁾」の歌から引いて「栖家能山」と題したようである。

八甲田山は青森県の中央付近にそびえる火山群で、岩木山に次ぐ青森県第二位の高峰の大岳（標高1,585m）を主峰とする連峰である（図2・3）。

『すみかの山』は、寛政8年（1796）4月13日から5月20日にかけて、現在の青森市から黒石市に至る津軽領内



図1 『すみかの山』表紙

秋田県立博物館デジタルアーカイブより
（原資料：秋田県立博物館蔵写本）

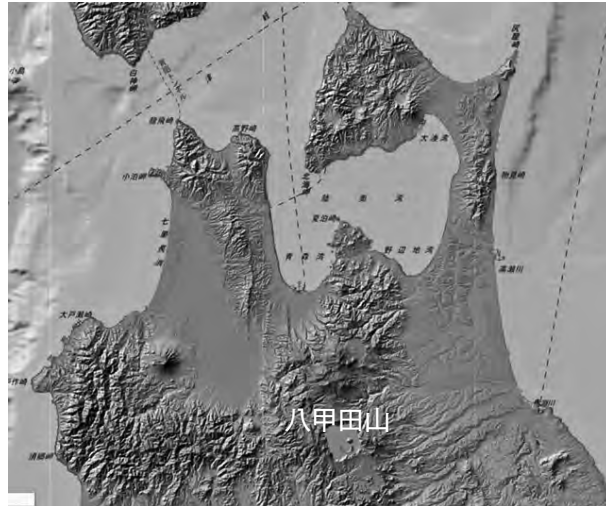


図2 八甲田山の位置（地理院地図を加工）



図3 春先の八甲田山の山容（2020年5月24日筆者撮影）

を歩いた際の日記であるが、現存するのは写本のみであり、真筆本は未発見である。写本は半紙本で、全60丁で59の図絵が挿入されている。題簽には「白井真澄大人撰 栖家能山」とあり、裏表紙の内側には「竹村氏」の墨書と、三行にわたって「センボク」、「二工竹村」、「ロクガウ」と刻まれた丸印が押印されている。真澄は仙北郡の地誌作成のため文政10年（1827）頃に六郷町の竹村家に滞在していることが『月の出羽路仙北郡』に記されていることから、この写本は、その頃に秋田領仙北郡六郷町の竹村吉幹により書写されたものと推定されている（内田・宮本1972）。

なお、真澄が自身で「すみかの山」を編む際のもとなったと推定される真筆の図絵が『錦木雑葉集』に若干残されており、その中に八甲田山の雪形の図絵も1枚含まれている。

『すみかの山』の翻刻・注釈本としては『菅江真澄遊覧記』3（内田・宮本1967）、『菅江真澄全集』3（内田・宮本1972）があるが、前者は抄訳であり、後者は原文を全て活字化し、図も全て掲載されているものの、図の挿入位置やトリミングの有無はわからない。そこで、本稿においては、基本的に原資料を所蔵する秋田県立博物館がデジタルアーカイブで公開している「栖家の山」の画像と、岡崎市立中央図書館の「菅江真澄資料内田文庫」所蔵の「栖家能山」複製本の写しをもとに検討し、必要に応じて他の資料を参照した。

II 真澄による雪形の記載

真澄は『すみかの山』以外に、『えぞのてぶり』、『おがらの滝』、『月のおろちね』、『さくらかり』、『ふでのまにまに』にも雪形のことを記しており、他に『錦木雑葉集』に八甲田山の雪形の図絵を1枚、岩木山の雪形の図絵を1枚残している。それぞれを見ると、真澄の雪形に関する具体的な記録は「すみかの山」が最初であり、内容的にも最も充実したものであることがわかる。

(1) 『すみかの山』における雪形の記載

『すみかの山』においては、以下の3か所に、「種蒔オツコ」、「蟹の鉋」、「牛の首」の3種の雪形が八甲田山に見られることが記されている。

①寛政8年4月20日の条の本文の間

半丁全面を使い、雪形の図絵と説明を載せている（図4）。釈文は図の横に起こしたが、雪形に関しては以下のような内容のことが記されている。

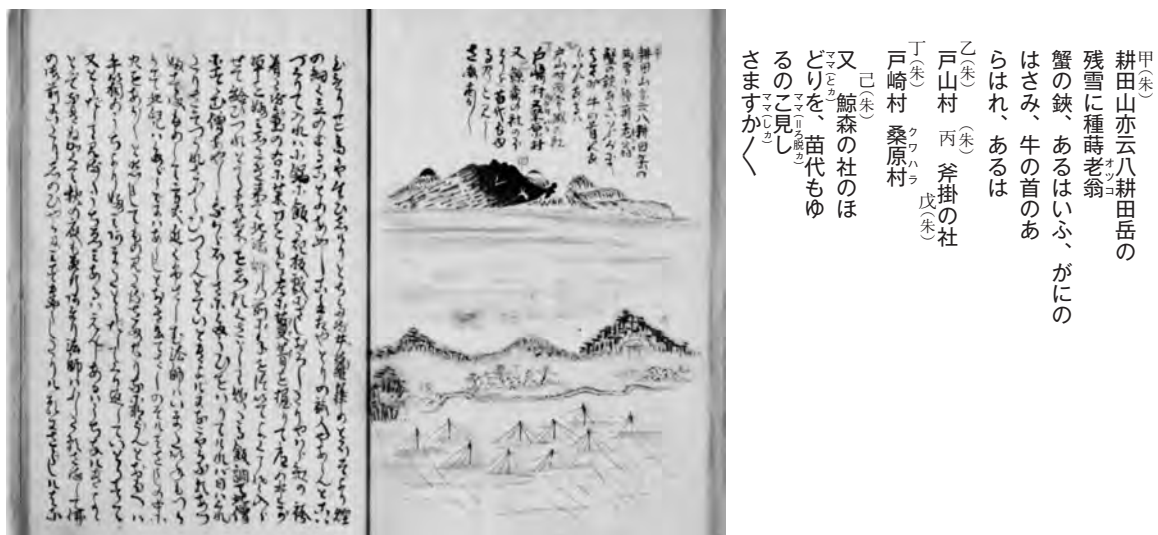


図4 『すみかの山』の雪形の記載 (1)

秋田県立博物館デジタルアーカイブより（原資料：秋田県立博物館蔵写本）

八甲田山の残雪に種蒔老翁（オツコ）、蟹の鉋或いはガニのはさみ、牛の首が現れる。

戸山村、斧掛の社、戸崎村、桑原（クワバラ）村、又、鯨森の社のほとりを、苗代が萌える頃に見た様子はしかじかのとおり

②寛政8年5月2日の条の本文の中

本文中の7行を使って雪形の説明をしている（図5）。図絵はないが雪形の種類は①と同じである。記載の文意は以下のとおりである。雪形が見える時期と農作業の関係まで具体的に言及されているところが注目される。



図5 『すみかの山』の雪形の記載 (2)

秋田県立博物館デジタルアーカイブより (原資料：秋田県立博物館蔵写本)

峰に、種蒔老翁（ヲツコ）、蟹子のはさみ、牛（ウシ）の頭（クビ）といって、雪もやや消えてゆき、苗代をまくころは、たねまきをつこが人の立姿をして見える。かにこの鉋が見える頃は田を掻き均し、うしのくびが見える頃に早苗を採って植える。それぞれのころにその形が現れる。雪は、6月半ばころには残らず消える。岩木山も同様である。

③寛政8年5月3日の記載の末尾

現在の青森市駒込に滞在した最終日に区切りを入れるように見開きで図絵を入れ、余白に説明を添えている（図6）。その文意は以下のとおりである。

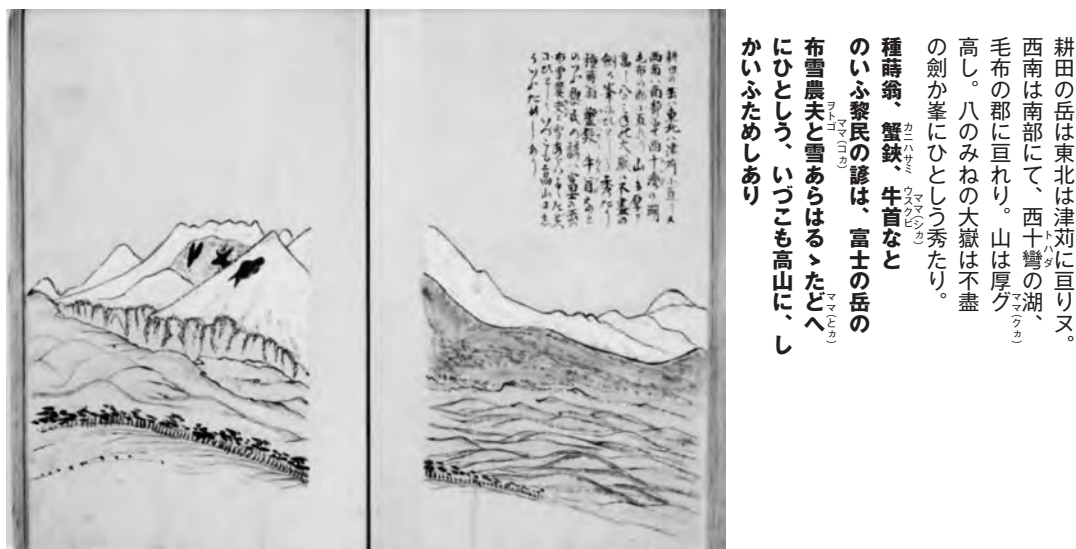


図6 『すみかの山』の雪形の記載 (3)

秋田県立博物館デジタルアーカイブより (原資料：秋田県立博物館蔵写本)

種蒔翁、蟹鋏（カニハサミ）、牛首（ウシクビ）などという黎民の諺は、富士山の布雪、農夫（ヲトコ）などの雪形が現れるたとえと同じで、どこの高山にもこうした例がある。

(2) 『錦木雑葉集』

『錦木雑葉集』は真澄の没後に散葉の草稿を一括して表装されたもので、題簽はないが、錦木塚にちなんだ内容を含むことから仮の題が付されたものである。写本しか伝わらない『すみかの山』に見える図絵と同じ構図の真澄の真筆も5枚含まれており、それらは『すみかの山』の草稿の一部と推定されるものである。そのうちの1枚（図7）は八甲田山の雪形に関するもので、図4の元絵と考えられる。

また、現在の弘前市付近から見たと推定される岩木山の雪形の図絵も1枚あるが（図8）、こちらは余白にメモ的な書き込みがあるものの、現存する真澄の稿本、写本に対応する文は見られず、詳細は不明である。

(3) 『えぞのてふり』、『ふでのまにまに』

『えぞのてふり』は寛政3年（1791）の5月から6月にかけて北海道の福山から虻田にかけて歩いた際の日記である。6月7日（1791年7月7日）の記載に、長万部の地名の由来が鰈の形をした雪形によるものであることを以下のように記録している。

「かゝる山（ノボリ）の雪の、やゝ消え残る形の王余魚（カレエヒ）に似てければ、アキノの辞に鰈（カレエヒ）をシャマンベといふ。斑雪（ムラユキ）の形（スカタ）をいふとならば砂王余魚（オタシャマンベ）といふべきを、略辞（ハブキコト）していへらん浦の名にや」

（内田・宮本 1971）

この記録は、『すみかの山』ほどの具体性を持つものではないが、真澄による雪形の記録の初例と



図7 『錦木雑葉集』の雪形の記載（1）

大館市立図書館所蔵画像

（原資料：大館市立栗盛記念図書館）

甲^(朱)耕田山
乙^(朱)戸山のやかた
丙^(朱)斧かけの社
丁^(朱)戸崎のやかた
桑原のやかた^(朱)
鯨杜の社^(朱)
戊^(朱)

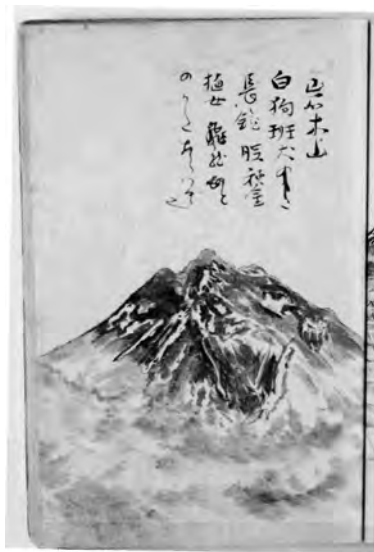


図8 『錦木雑葉集』の雪形の記載（2）

大館市立図書館所蔵画像

（原資料：大館市立栗盛記念図書館）

岩木山
白狗、班犬のかた
長鑱、股鋏、
植女、飛龍など
のかたあらはるゝ
也

思われる。この例は、後の日記に他の雪形の引き合いとして出されることはなかったが、文化8年(1811)以降に長期にわたって執筆されたと考えられている随筆『ふでのまにまに』の第三巻において再び触れられている。

(4) 『おがらの滝』

『おがらの滝』は能代以北の秋田領を歩いた際の日記で、文化4年(1807)4月20日(1807年5月27日)の記載及び天註に、雪形についての記載が見られる。

現在の能代市北部から見た船が沢の兎雪と呼ばれる雪形と、「上」の字形の雪形が山名の由来となったという白上(神)山について、以下のように記されている。雪形と田打ち関係の他に、雪形と鰯漁との関係に言及していることも注目される。

「出て遠かたを向かへば、正子にあたりて見ゆるは船が沢の兎雪、亥の方に見へたる上の字が嶽は、消へ残る雪の形の上文字をなせば、かれをもて白上(神)山の名におふことにや」[天註——世のなりはひのよしあし、或田佃のときの占ひに富士山の布雪、農男、釜臥山の牡丹、岩木山ののぼり竜、くだり竜、耕田の嶽の蟹子のはさみ、種蒔法師、此舟が沢山の兎雪、あるは上文字山、又白上、あるは白神といふもおなじためし也]これをためしに早苗とるころとて、田打ちの心いそぎし。浦の海士は、はや鰯の来べきころおひと漁のまふけをせり」

(内田・宮本 1973)

(5) 『月のおろちね』

『月のおろちね』は文政9年(1812)7月の日記で、19日に鶴が峯の雪形について記されている。

「めての雨雲のうちに、見えみ見えずみ鶴が峯といふあり。こは富士の布雲 耕夫、栗駒山(岩手県)の馬形、岩木峯(青森県)の竜形、釜臥が嶽(青森県下北)の牡丹、小田山(青森県八甲田山)の蟹の缺なソンドのごとく、この峰の雪もけち行くころは、鶴のすがたのあらはれける、それをもて鶴箇峯とはいふとなん」

(内田・宮本 1974)

(6) 『さくらかり下』

『さくらかり下』は文政期に書かれた随筆と推定されており、「雪船の山桜」の見出しの文に現在の北秋田市から見た文珠山の舟の形の雪形について以下のように記されている。

「また、文珠山の雪の舟の形すればその消るを見はかりて稲田佃(つく)るといへり。不二の布雪、野男(農男とも)のためしにひとし。」

(内田・宮本 1974)

Ⅲ 真澄が『すみかの山』の雪形を描いた場所と時期

Ⅱで見たように、真澄は『すみかの山』の中の3か所で雪形について触れ、2枚の図絵を挿入しているが、具体的に、いつ、どこから描いたかについては記していない。2枚の図絵についても少なからず差異が見られ、異なる場所から描かれたものである可能性も考えられる。また、雪形に関する記載は5月2日の本文中にあるものの、同日の冒頭には「空のくもりたり、雨ならん」とあることから、実際に雪形を見たのは別の日である可能性が高い。図絵が挿入されている4月20日、5月3日も駒込から他所への移動日であり、天気や移動方向を考慮するとそれらの日に雪形を見たとは考え難い。真澄が雪形の図絵を描いた場所はどこで、描いた日はいつであろうか。

(1) 描いた場所

描いた場所を知る手掛かりとなるのは日記の中における図絵の挿入箇所と、描かれた山容である。本文や図絵はいずれも駒込滞在中及びその前後であることから大まかには駒込から見た景観と推定するのが妥当である。八甲田山は複数の頂を持つ連峰であることから、見る場所によって峰々の重なり方は変わる。2枚の図絵の微妙な差異がそれを反映したものであるとすれば、それらは異なる場所から描かれたものであることを意味することとなる。峰の重なりの状態を分析することで描いた場所を絞り込むことも可能となろう。

ただ、現存する『すみかの山』は写本のみであることから、写本にどの程度の信頼度があるかがまず問題となる。この点については、『錦木雑葉集』に残る真筆との比較などから手掛かりが得られる。

図7に示した真澄の真筆を図絵A、図4に示した写本にある同じ構図の模写を図絵A'として両者を比較してみると、写本の方に稚拙さはあるものの、全体的な構図や、描かれている地物の位置関係、八甲田山の峰々の重なりは忠実に写されていることがわかる(図9)。書き込まれた文字を見ると、図絵Aはメモ的であり、図絵A'はそれを文章化したものとなっている。文章は描かれた景観に対応するもので、地名の相対的な位置関係も实景に即したものとなっている。写本の書写者は先に述べたように秋田仙北郡の人であり、描かれた付近に対する土地勘はないと考えられることから、真澄の図絵や文章を忠実に写すことを心掛けた様子がうかがわれる。真筆は八甲田山がやや右下がりに傾いて描かれているが、写本ではそれが修正されているように見える。真澄が図絵Aをもとに『すみかの山』に改写する際に傾きを調整したことを反映したものと推定される。

図6は、写本においては1枚の図絵を左右の丁に振り分け、本の咽の部分を開けて見開きに組まれたものである。図10は、図6の咽の空白部分を削除して合わせ、さらにその直前に挿入されているモヤ峠付近が描かれた図絵をつなげたものである。これらは本来一続きの絵であることがわかる。便宜的にこの二丁一連の図絵を図絵Bとし、それぞれ図絵B1、B2、B3と区分する。

真澄が『すみかの山』を編む際に、図絵Bの1枚の下絵をもとに同じ丁に図絵B1とB2が繋がるように描いて表裏とし、図絵B3は別の丁の表に描いてそれぞれ折った際にB2とB3が咽に余白を持たせて見開きになるよう仕立てたものと思われる。

図絵Aは真筆、図絵Bは模写で、構図も異なるが、ともに八甲田山の雪形が描かれたものであることから、両者を比較することで見えてくることもある。

図絵 A 真筆



図絵 A' 模写



図9 真筆と模写の比較

図絵 B3



図絵 B2



図絵 B1



図10 図絵Bの全体像

まず、大きな違いは図絵 B には雪形のネガ・ポジに逆転⁽⁵⁾が見られることである。図絵 B には白い山体にネガ型の雪形が3体黒く描かれている。向かって右側が「種まきオッコ」、真中が「牛の首」、左側が「蟹の鉋」である。八甲田山には峰々に個々の山名もあるが、「種まきオッコ」が描かれた最も手前の三角形の山は前岳、「牛の首」と「蟹の鉋」が描かれた山は赤倉岳である。

真筆の図絵 A では「牛の首」と「蟹の鉋」がポジ型の雪形として白く描かれているのに対し、模写の図絵 B では逆転してネガ型の雪形として描かれているのであるが、实景ではポジ型であることから、図絵 B はその部分の着色を誤ったことになる。

また、図 10 に明らかなように、山体の着色にも誤りが見られる。左右の丁を別々に着色したことによって生じた齟齬と思われる。図絵 B2 は B1 と同一丁に連続的に描かれたのに対し、図絵 B3 は咽の余白を挟んだ別丁であったことから製本時まで気づきにくかったものと考えられる。こうした着色の誤りは写本作成時の模写の過程で生じたもので、实景が頭の中にある真澄による『すみかの山』原本では正しく着色されていたものと考えられる。

写本には着色の誤りがあったものの、図絵 B 全体の構図を見ると、図絵 B1 の前景には、幸畑の集落と川を挟んで駒込の集落も描かれていることから、絵を描いた際の視点は駒込集落の北東側にあったことがわかる。次に、峰々の重なりに注目してみる。図絵 A では「種まきオッコ」が描かれた前岳と「牛の首」、「蟹の鉋」が描かれた赤倉岳の間の奥に白い頂が描かれているが、位置関係や雪の量から考えるとこの頂は八甲田山の主峰の大岳と考えられる。前岳の右奥に描かれたのは田茂菰岳であろう。赤倉岳の左奥には高田大岳もしっかり描かれている。これに対し、図絵 B では大岳が前岳と田茂菰岳の間に覗き、前岳は相対的に高く、高田大岳は低く描かれている。こうした違いは些細な差のようにも受け取れるが、意識的に描写されたものと捉えると、視点の違いが見えてくる。

大岳の重なり方は図絵 A が図絵 B よりも東側遠方から見ていることが示唆され、高田大岳の見え方もそれを支持する。前岳の見え方の違いも八甲田山からの距離間の違いを反映したものと考えることができ、図絵 B の方がより近くから八甲田山を望んでいることがわかる。



図 11 図絵 B を描いた付近からの光景

上：景観シミュレーション

中：図絵 B の横比を上に合わせて加工

下：写真

青森市原別から



青森市小柳から
(八重田の代替)



図 12 図絵 A を描いた場所付近からの景観
(写真上：図絵 A 上半部、写真下：図絵 A 下半部)

その範囲の中でも赤倉岳と大岳の間に前岳の頂部が突き出て見えるのは北寄りの一部のごく狭い範囲に限られる。

このような峰々の関係性を意識して真澄が描写しているとの前提に立てば、図絵 B が描かれた場所は自ずと浜館集落と駒込集落の間の駒込寄りに絞られる（図 13 参照）。ちょうど先に想定された駒込集落の北東側にあたる。図 11 下の写真は、その付近から撮影したものであるが、図絵 B で前岳の下に描かれた駒込川が侵食した谷の見える方も実景と整合的である。真澄は峰々の見え方を相当に意識して実際の景観を描き、写本の書写者は、画力の差や着色の誤りはあるつつも、真澄の描写の忠実な模写に努めたことがわかる。

同様の観点で図絵 A を見ると、それが描かれた場所も絞り込むことができる。先に見たように、前岳と大岳の見える方の違いから図絵 A は図絵 B より東側の遠方から描かれていると推定できるが、その中でも図絵 A のように前岳の頂部が大岳と田茂菰岳の間に突き出して見えるのは原別集落付近に限られる（図 12 上）。それより東にずれると八甲田山は前景に隠れ、西にずれると前岳の背後に赤倉岳が重なるようになる。図絵 A の上半部の八甲田山の絵は、原別付近から描かれたものということになる（図 13 参照）。

図絵 A 下半部がどこから描かれたかについては、図絵中に示された地名から類推することができる。真澄が付した朱書きにより、右端の「乙」の集落は戸山、以下順に左に向かって「丙」の小山は斧掛神社、「丁」の集落は戸崎、「戊」の集落は桑原、左端の「己」の社は鯨杜と、描かれた対象を特定することができる。前景に描かれている苗代も含め、このような景観を一望できるのは原別の西隣の八重田付近である（図 12 下⁽⁶⁾）。上半部の八甲田山を描いた原別からでは前景に隠されて桑原から戸山に至る集落は見え、八重田から見た八甲田山の峰の重なりは微妙に異なる。関係するものとして 1 枚に収めつつも、上半部と下半部は少し離れた別地点からの絵であることから、八甲田山と前景を図絵 B のように連続的に描かずに、間に空白を置いたのであろう。

こうした峰の描写が意識的なものであることについては、図絵 B の雛岳と櫛ヶ峰の表現からうかがうこともできる。写本にどちらの稜線も明瞭に描かれているのは、当然ながら真澄の原本にその描写があったからであろう。主峰を中心とした山塊からやや離れ、相対的に標高も低い雛岳と櫛ヶ峰の稜線は目立つものではない。特に雛岳の実際の見え方は微妙であり、この構図より東側に視点がずれると前景に埋没してしまう。また、前岳が赤倉岳と大岳の間に見える範囲の東西の幅も限られており、

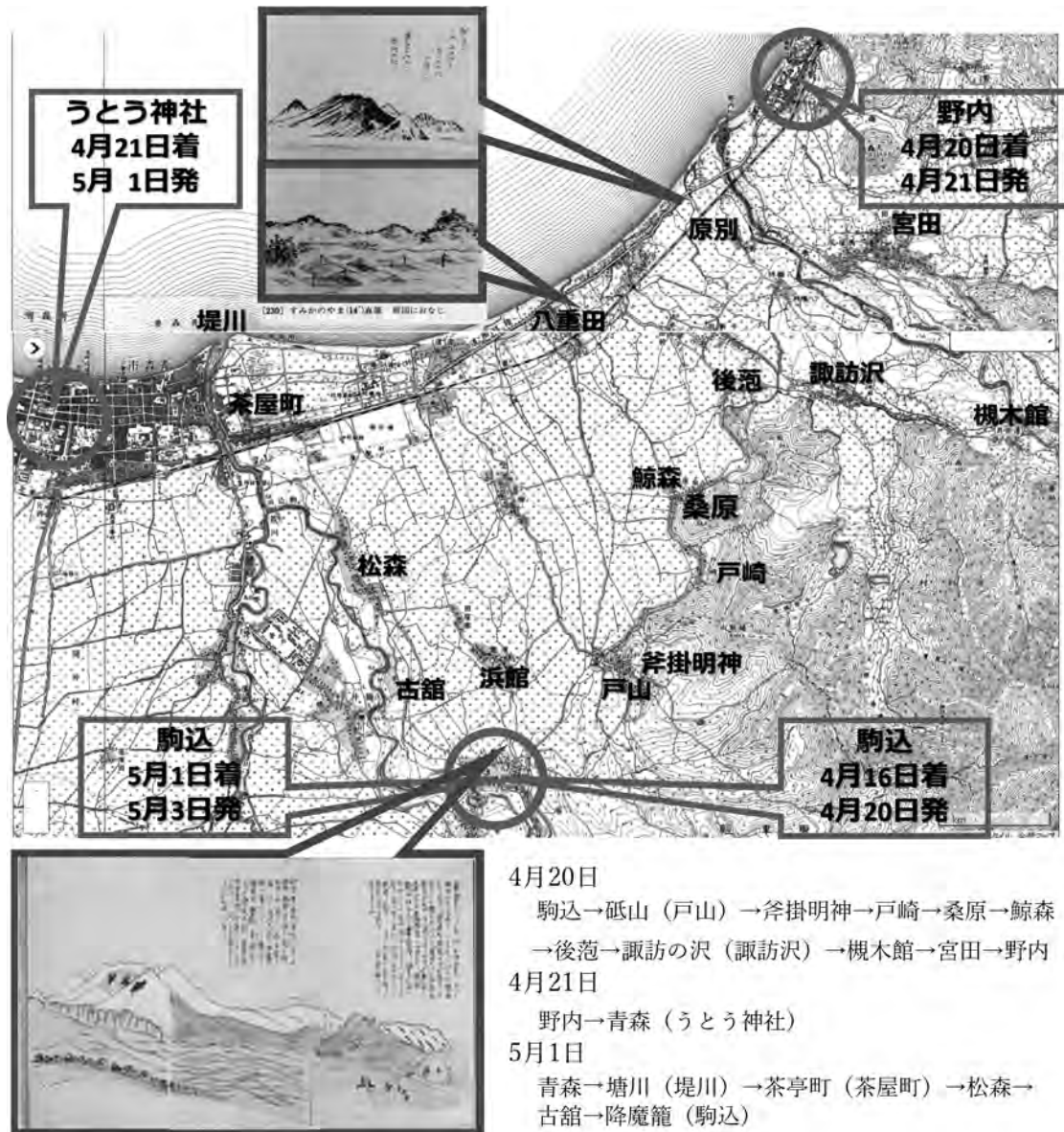


図13 真澄の旅路

以上のように考えると、図絵A上半部は原別付近から、下半部は八重田付近から、図絵Bは駒込付近からそれぞれ描いたものと推定される。これらの地区はいずれも『すみかの山』における真澄の移動経路に重なるものでもある。

(2) 描いた時期

真澄がいつ、どこを歩いたかについては日記を読むとわかる。先に見た図絵を描いた場所を通過した日がわかれば、それぞれの図絵を描いた日を絞り込むことも可能と思われる。

『すみかの山』における真澄の旅路は表1のとおりである。図絵が挿入されていたのは、図絵A'が寛政8年（1796）の4月20日の本文の途中、図絵Bが同5月3日の終わりである。両日とも駒込（別称宮崎）に関する記載のある日であり、推定された図絵を描いた場所もこの旅程と整合的である。

真澄は、4月16日に駒込の神主の阿保家に着き、しばらく逗留した後、20日に一旦駒込を去って野内に向かった。そして、野内から青森に寄り、5月1日に再び駒込の阿保家に戻って、最終的に駒

表1 真澄の旅程

すみかの山（寛政8年4月13日～5月4日）

記載	現行暦	経由地	宿泊先	備考
13日?	5月19日	蒼杜、大浜、十二所権現	神主沢田	
4月14日	5月20日	早朝大浜発、新田、石神經由で三内、浪館、安田、細越、高田、館中野	館中野	桜見物のため三内へ、縄文土器の紹介も
15日	5月21日	乳内、荒川、八役、妙見、横内村	横内村	
16日	5月22日	早朝出発、幸畑、駒込着	駒込神主阿保某	
17日	5月23日	桐の沢、小河沢、横滝	同上	ふるきところどころ見さぐらん
18日	5月24日	終日阿保宅	同上	雨のため休み、主と物話
19日	5月25日	幸畑、青砥山、馬の神山、天狗森、石家戸、……小峠、大峠、駒込	同上	駒込川の川上に大滝という面白いところあり
20日	5月26日	駒込発、砥山、斧掛明神、戸崎、桑原、鯨森、後范邑、諏訪の沢、槻木館、宮田、野内	野内柿崎の宿	雨のため駒込を昼に出発 絵A挿入
21日	27日	早朝青森に至る		
22～27日		記載なし（野内か青森か）	この間野内？ 青森？	
28日	6月3日	青森か	青森（善知鳥神社）か	旧知の深沢常逢と語らい
29・30日		記載なし（青森か）	青森（善知鳥神社）か	
5月1日	6月6日	朝、塘川を渡り、茶亭町、松森、古館、降魔籠（駒籠、昔は宮崎）	駒込阿保安澄の屋戸	霍公鳥きかばや
2日	6月7日	終日駒込か	同上か	雨、つつじの話、本文中に雪形の話
3日	6月8日	宮崎（駒込）発、桑畑（幸畑）か長浜、大屋沢、四ツ石、横内、合子沢、雲谷峠、野木、金浜、雄別内	かねばま	絵B挿入
4日	6月9日	上野、上牛館邑		
以下略				浪岡方面へ

込を去ったのは5月3日であった。その前後に駒込に立ち寄った形跡はなく、図絵はこの4月16日から5月3日の間に描かれたものである蓋然性が高い。

真澄が八甲田山の雪形のことを知ったのもこの駒込に入ってからのことと思われる。Ⅱで確認したことから類推すると、真澄は東北に入る以前から富士山の雪形については知っており、駒込で初めて実際の雪形を見聞してから、その後も関心を持ち続け、徐々に類例を蓄積していったものと思われる。『おがらの滝』に記された雪形の数々はその集成と言えるものであるが、『すみかの山』の雪形の記録は年代的に見ても真澄が記した最初の雪形の記録と見ることができる。

日記に記載された真澄の行動や天気に基づいて、以下に真澄が八甲田山の雪形を知った時期や図絵を描いた時期の推定を試みる。

図絵Aの上半部が描かれたと推定される原別と図絵A下半部が描かれたと推定される八重田は、真澄が4月21日早朝に野内を立てて青森に向かう経路上にある。真澄がこれらの図絵を描いたのはそこを通過した4月21日と考えるのが妥当であろう。

図絵は20日に挿入されているものの、その日は駒込を立った日である。雨のため昼頃の出立となり、野内までの道からは八甲田山は死角に入ることからその日は雪形を見ることはできなかったと考えられる。それ以前の16日から19日も移動先への経路や天気を考えると結果的に駒込滞在中に実際の雪形を見る機会はなかったものと思われる。18日に阿保氏と様々語った中で八甲田山の雪形を知り、それと意識して八甲田山を最初に見ることができたのが原別だったものと推定される。20日の宿の野内からは前景に遮られて八甲田山は見えないが、21日早朝、青森に向かってほどなく、野内川付近で八甲田山が見え始め、川を越えて原別の集落に入ったところで雪形を落ち着いて見ること

ができたものと思われる。さらに青森に向かって歩を進め、八重田付近に差し掛かると、前日に駒込から野内に向かって歩いた際に通った斧掛神社から鯨杜にかけての集落が八甲田山を遠景に一望され、その前景に苗代が広がる様子を目にするようになる。話に聞いた雪形と田植えの関係を示すべく、図絵 A の下半部にその様子を組み合わせたのではなかろうか。

以上のことから図絵 A は上半部、下半部とも、野内から青森に向かった寛政 8 年 4 月 21 日（1796 年 5 月 27 日）に描いたものと考えられる。

図絵 B を描いたと思われる浜館と駒込の間の駒込寄りの地点は、5 月 1 日に再び駒込を訪れた際の経路上と推定される。5 月 1 日に青森を発った真澄は堤橋を渡って茶屋町、松森、古館を経て駒込の阿保家に向かった旨記しているが、古館からそのまま駒込方面に進んだのではなく、あえて浜館方向に左折し、浜館から駒込に向かって駒込に入る手前でこのパノラマを描いたことになる。

本文に雪形の記載があるのは 5 月 2 日であり、図絵 B が挿入されているのは 5 月 3 日の後ではあるが、2 日は曇りで雨が降りそうな天気であり、3 日は幸畑から四ツ石、横内方面に向けて駒込を後にした日である。描いた日は 5 月 1 日であったと考えるのが妥当であろう。

(3) 小結

以上を受けて、真澄が八甲田山の雪形を描いた時期と場所をまとめると以下のように推測することができる。

真澄は、寛政 8 年 4 月 16 日に駒込に入り、滞在先の阿保家で 18 日に雪形の話聞いたと思われるものの、滞在中に雪形を見ることができないまま 20 日に駒込を後にして野内に向かった。翌 21 日、野内から青森に向かう際に、原別において雪形をそれと意識して見ることとなり、図絵 A の上半部を描いた。歩を進めて八重田に差し掛かると、前日に駒込から野内に向かって歩いた経路の手前に苗代が広がる様子が一望され、八甲田山も遠望できたことから、図絵 A の下半部にその様子を描いた。そのまま八甲田山を左手に見ながら西に向かって青森に着き、善知鳥神社にしばらく滞在した後、5 月 1 日に再び駒込に向かった。堤橋を越えてからは八甲田山を正面に見ながら進み、古館からは八甲田山を右手に見ながら浜館方向に移動し、駒込集落に入る手前から図絵 B を描いた。八甲田山を横目に見ながら歩くと峰々の重なりの変化が、正面に見ながら歩くと前岳の視覚上の高さの変化がわかる。図絵 B は真澄が考える最適の構図で描かれたものと見ることもできよう⁽⁷⁾。

こうして描いた下絵や日記の手控えをもとに真澄自身が『すみかの山』を編んだ際に、図絵 A は 4 月 20 日の途中に挿入され、図絵 B は 5 月 3 日の最後の部分に見開きで挿入された。駒込での見聞を締めくくるように、どちらも駒込を立ち去る日に挿入されたことになる。

旧暦は季節に対する日付のズレが年ごとに大きく異なることから、対比ができるようグレゴリオ暦に直すと、図絵 A を描いた寛政 8 年 4 月 21 日は 1796 年 5 月 27 日、図絵 B を描いた 5 月 1 日は同年 6 月 6 日となる。雪形が見える時期としては違和感がないことから、真澄は実景を見ながらそれらの図絵を描いたものと考えられる。

IV 現代における八甲田山の雪形

(1) 八甲田山の雪形に関する先行研究

青森県の雪形のことを記した初期の資料としては『すみかの山』の他に、「津軽俗説撰後拾遺」の載る『津軽俗説撰』（青森県立図書館青森県叢書刊行会編 1951）、『津軽口碑集』（内田 1929）があるが、後二者では八甲田山の雪形については触れられていない。現代において最初に八甲田山の雪形について記したのは柳田国男の『分類農村語彙』（柳田 1937）と思われる。その中で柳田は、

「タネマキオツコ 山に消え残った雪の形に名を付けて、之を農候として居る土地は多いが、津軽の八甲田山の種蒔きオツコなどは、偶然にもその形が老爺の物を蒔く姿と似て居るので、一段と暗示を有力なものにして居る（栖家の山）。或は種まきぢつさといふ雪の名を、傳へて居る土地もある。さう精確には似て居なくてもよかつたかと思ふ」

と、記しており、真澄の『すみかの山』からの引用であることを示唆している。そこで取り上げられたのは、真澄が記録した三つの雪形の内「タネマキオツコ」だけであるが、それをさらに引用する形で宮本常一も『民間暦』（宮本 1942）の中で、雪形の代表的な事例として長野県爺ヶ嶽の「種蒔爺」とともに八甲田山の「タネマキオツコ」を紹介している。柳田や宮本が言及したからか、八甲田山の雪形と言えばタネマキオツコがしばしば引用される。

『すみかの山』は近世のうちに版本化されることはなかったことから知る人は極めて限定的だったと思われる。印刷物として全国的に知られるようになるのは『菅江真澄遊覧記』（内田・宮本 1967）と『菅江真澄全集』（内田・宮本 1972）であるが、最初に印刷物として掲載されたのは昭和 8 年刊行の『秋田叢書別集 菅江真澄集第六』（秋田叢書刊行會編 1933）と思われる。同書に『すみかの山』の文とともに図絵も掲載されたことから、それにより八甲田山の雪形を知る機会を得た人もいたと思われる。この本の監修者は柳田国男であることから、柳田は『分類農村語彙』に「タネマキオツコ」を紹介する以前、叢書の監修者として、底本とされた『すみかの山』の写本（当時秋田図書館蔵）を見ていた可能性があり、少なくとも叢書刊行以前から「タネマキオツコ」のことは知っていたものと思われる。

八甲田山の雪形を具体的に掘り下げたのは室谷洋司である。室谷は田淵行男の『山の紋章 雪形』（田淵 1981）に協力者として参画し、青森県の雪形の事例を記録したほか、特別寄稿として「津軽雪形行脚」（室谷 1981）を寄せている。室谷はその後も調査を継続して八甲田山の雪形に関する論考等を発表している（室谷 1999a、2002、2006、2011）他、青森県内の他の山の雪形についても紹介している（室谷 1999b 他）。

この他、村上義千代は新聞連載「青森 110 山」で八甲田山の雪形に関する聞き取りを紹介し（村上 1999）、深澤恭仁は『すみかの山』に関する講演の中で雪形についても論じている（深澤 2014）。なお、深澤の撮影した八甲田山の雪形の写真は秋田県立博物館の図録にも掲載されている（秋田県立博物館⁽⁸⁾ 2014）。



図 14 八甲田山の雪形（2020 年 5 月 26 日筆者撮影）

（2）2020 年、2021 年の八甲田山の雪形

菅江真澄の雪形が現代においても確認できることについては、既に室谷や村上により紹介されているが、筆者は 2020 年、2021 年を中心に、以後継続的な調査を行った。真澄が雪形を記録した青森市駒込付近、青森市原別付近で写真撮影、聞き取り調査を行った他に、青森市松原では連日の定点観察を行った。松原は駒込の図絵 A が描かれた付近からは北西に 2.5 km 余り、原別の図絵 B が描かれた付近からは 5 km 弱南西に位置するが、真澄の記録した三種の雪形はいずれも見える。駒込や原別に比べるとやや西側から眺めることにはなるが、雪形の変化を追う分には問題ない。

①年による残雪量の違いの比較

真澄が絵を描いたと思われる日を現行暦（グレゴリオ暦）に置き換え、同じ日付で 2020 年、2021 年との比較を試みた。2020 年は記録的な小雪、2021 年は一転して多雪の年である（表 2）。積雪期における雪の量の多寡が雪形に反映されるかどうかを確認するのに適した 2 年でもあった。

まず、図絵 A が描かれた寛政 8 年 4 月 21 日を現行暦に置き換えた 5 月 24 日を基準として比較してみる。

図 15 右の写真を見ると、残雪の状況に微妙な違いはあるが、2020 年、2021 年の両年とも 1796 年（寛政 8）と同様に三種の雪形を見ることができた。いずれにしろこの時期は、18 世紀末においても

表 2 青森市内及び八甲田山中の積雪の状況

	青森市内（青森地方気象台）			八甲田山（酸ヶ湯）		
	累積降雪量（cm）	最深積雪（cm）	積雪 0 初日	累積降雪量（cm）	最深積雪（cm）	積雪 0 初日
平年	662	107	4 月 16 日	1,706	—	
2020 年	264	31	2 月 15 日	1,228	348	5 月 25 日
2021 年	483	129	3 月 20 日	1,423	443	5 月 19 日
2022 年	600	149	3 月 29 日	1,696	373	6 月 12 日

青森地方気象台の資料に基づき筆者作成

* 累積降雪量は前年 10 月から当該年 6 月までの合計、積雪 0 初日は最新積雪後に 2 日以上 0 が続いた初日

寛政8年4月21日（現行暦5月27日）原別からか

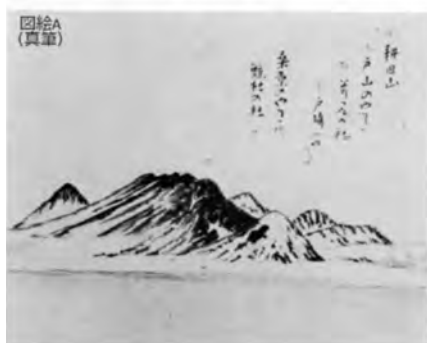


図 15 図絵 A との比較



（筆者撮影）

寛政8年5月1日（現行暦6月6日）駒込からか

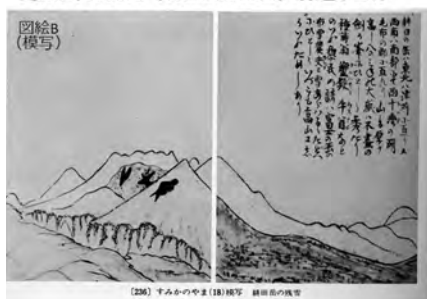


図 16 図絵 B との比較



（筆者撮影）

現在においても、積雪の多い年も少ない年も三種の雪形が見える時期ということになる。

次に、図絵 B が描かれた寛政 8 年 5 月 1 日を現行暦に置き換えた 6 月 6 日を基準として比較して⁽¹¹⁾みる。

図 16 右の写真を見ると、18 世紀末には三種の雪形が描かれているのに対し、2020 年も 2021 年も「牛の首」と「蟹の鉗」の二種は見えるものの、「種まきオッコ」の姿は消えている。現在の気候では 6 月に入るとかすみがちになることから、写真ではやや見づらいが、冬期の積雪の多寡に関わらず 2020 年も 2021 年も同じような状況である。18 世紀末に比べると、現代の方が相対的に融雪の進行が早い傾向にある可能性も考えられる。

②同一年における雪形の変化

同じ年の中で雪形がどのように変化していくのかについては、2020 年、2021 年の観察結果を表 3 に示し、2020 年の変化の様子を示す写真を図 17 に挙げた。

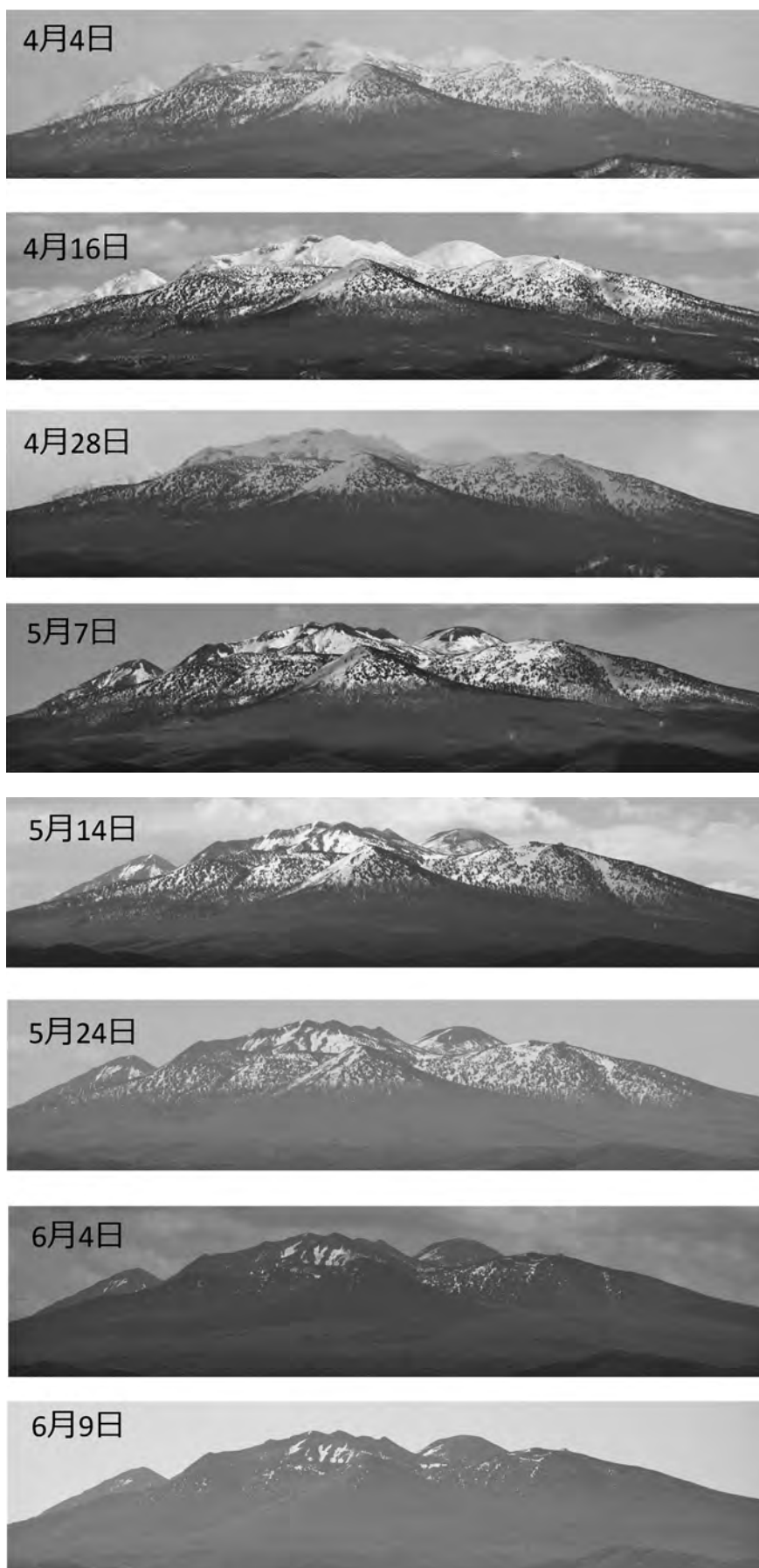


図 17 2020 年の雪形の変化（筆者撮影）

表3 雪形の存続期間とその他の事象との関係

現行暦	農作業			蟹の鉢、牛の首			種まきオッコ		
	すみかの山	2020 年	2021 年 種まき	すみかの山	2020 年	2021 年	すみかの山	2020 年	2021 年
4 月 10 日									
4 月 11 日									
4 月 12 日									
4 月 13 日									
4 月 14 日									
4 月 15 日									
4 月 16 日									
4 月 17 日									
4 月 18 日									
4 月 19 日									
4 月 20 日									
4 月 21 日									
4 月 22 日									
4 月 23 日									
4 月 24 日									
4 月 25 日			駒込田起こし連休前						
4 月 26 日									
4 月 27 日									
4 月 28 日									
4 月 29 日						ほぼ完成			
4 月 30 日									
5 月 1 日									
5 月 2 日									
5 月 3 日									
5 月 4 日									
5 月 5 日			駒込水があがる						
5 月 6 日									
5 月 7 日					近い				
5 月 8 日					ほぼ完成				
5 月 9 日									
5 月 10 日									
5 月 11 日									
5 月 12 日							近い		
5 月 13 日									近い
5 月 14 日									
5 月 15 日									
5 月 16 日									ほぼ完成
5 月 17 日									
5 月 18 日			駒込シロカキ						完成か
5 月 19 日									
5 月 20 日									
5 月 21 日									
5 月 22 日			原別田植え				ほぼ完成		
5 月 23 日									
5 月 24 日		田植え直後か					完成か		
5 月 25 日			駒込田植え						
5 月 26 日			駒込田植え		鉢が細く				
5 月 27 日	苗代もゆる			図絵 A			図絵 A		
5 月 28 日						牛崩れつつ			崩れつつ
5 月 29 日									
5 月 30 日								崩れつつ	
5 月 31 日									
6 月 1 日								ほぼ崩れ	ほぼ崩れ
6 月 2 日								崩れ	
6 月 3 日					牛崩れつつ			消滅	崩れ
6 月 4 日									
6 月 5 日						牛ほぼ崩れ			消滅
6 月 6 日				図絵 B			図 B		
6 月 7 日				雪形記事					
6 月 8 日									
6 月 9 日					牛ほぼ崩れ				
6 月 10 日									
6 月 11 日									
6 月 12 日									
6 月 13 日									
6 月 14 日									
6 月 15 日									
6 月 16 日									
6 月 17 日									
6 月 18 日									
6 月 19 日									
6 月 20 日									
6 月 21 日									
6 月 22 日									
6 月 23 日	大鰐田植え								
6 月 24 日									
6 月 25 日					蟹辛うじて				
6 月 26 日									

[illegible]

図 17 で見ると、4 月中はまだ残雪が多く、三種の雪形は見ることができない。5 月に入ると 7 日には「牛の首」と「蟹の鋏」に近づいている様子があり、8 日にはほぼ識別できるようになった。どちらが先というほどの明確な差はなく、ほぼ同時に出現したと言ってよい。「蟹の鋏」は次第に細くなりつつも、6 月 25 日までは辛うじて認識することができた。「牛の首」は、6 月 3 日頃から崩れ始め、9 日にはほぼ識別できなくなった。これに対し「種まきオッコ」は、5 月 12 日頃からその部分の山肌が見え始め、21 日頃にはほぼそれらしくなり、24 日頃にそれと識別できるようになる。崩れるのは早く、30 日頃には崩れ始め、6 月 1 日にはほぼ崩れて、3 日には消滅していた。

2021 年は、多雪だった割に 3 月の雪解けが早く、その影響もあってか雪形の進行は 2020 年度より相対的に早い。「牛の首」と「蟹の鋏」がほぼ形を成したのは 4 月 29 日と 9 日ほど早く、崩れるのも同様に早かった。「種まきオッコ」は 5~6 日早く出現したが、前年より若干遅くまで識別できた。

この 2 年間を通して見ると、共通して言えることは以下のとおりである。

- 「牛の首」と「蟹の鋏」はほぼ同時に出現し、消えるのは「牛の首」の方が早い。
- 「種まきオッコ」は他の二種より遅く出現し、消えるのも二種より早い。
- 「種まきオッコ」が現れている間は、他の二種も見えている。
- 三種とも見える期間は 13 日~19 日程度である。

こうしたことは、雪形の進行には年による遅速の差はあるものの、現象的には自然の摂理に適ったものであることから、相対的な関係性は近世においても変わらないものと考えられる。上記の事実と『すみかの山』の雪形を比較して見ると、以下の点を指摘することができる。

- 真澄は、苗代をまく頃に「種まきオッコ」、田を掻き均す頃に「蟹の鋏」、早苗をとって植える頃に「牛の首」が現れるとするが、実際には最初に「牛の首」と「蟹の鋏」が同時に出現し、「種まきオッコ」は最も遅く現れる。
- 真澄の描いた図絵 A は、「苗代もゆるのころ」とされるが、描かれている雪形は三種であり、整合性がない。
- 真澄の描いた図絵 A と図絵 B にはいずれも三種の雪形が表されている。筆者の検討では、前者が現行暦に置き換えて 5 月 27 日頃、後者が 6 月 6 日頃と推定され、その間は 11 日である。11 日間は、三種の雪形が見える期間としては妥当性がある。
- 図絵 B が描かれた現行暦 6 月 6 日頃に三種の雪形が見えているのであれば、相対的に現代よりも近世の方が雪解けの進行が遅いと考えられる。
- 三種の雪形が見えている時期で比較すると、相対的に近世の方が 1 週間から 10 日前後程度遅い可能性が考えられる。
- 図絵 A が描かれた現行暦 5 月 27 日頃は「苗代もゆるのころ」の状態であったが、2021 年の同時期の駒込では田植えが行われていたことから考えると、現代に比べて近世の方が田植え時期が遅くなっていると考えられる。

近世の方が相対的に雪解けの進行が遅いのは、当時の気象を反映したものと見ることもできる。18世紀は地球規模での小氷期の中にあり、概して現代より寒冷だったと思われるが、近年の研究により詳細な変動もわかってきている（中塚監 2020 他）。寛政期は、とりわけ寒冷だった天明年間（1781～89）を経て、比較的温暖となる19世紀初頭に向けた途上にあったものの、現代に比べればまだ寒冷だったことを反映しているものと思われる。近世の方が田植えの時期が遅いのもそうした気候の状況や、稲の品種の影響が考えられる。雪形の出現、消滅の時期はそれと連動して現代より遅い傾向にあったとしても、それぞれの出現の順序が入れ替わったとは考えられない。真澄が聞き書きを行った時点において、雪形は田植え前後に見られるという大枠は合っているものの、具体的な作業の目安としてみると、必ずしも実態に即したものとはなっていなかった可能性が考えられる。

図4には、「苗代もゆるのころ」と書き込まれているが、それが「萌ゆる」であれば芽が出たころとも受け取れる。雪形を目安に田植えを行っていたのであれば、その時点で既に「早苗とり植える」作業が始まっていたはずであるが、実際には「苗代もゆる」状態だった。図絵Bの時点においても真澄は田植えについては何も書いていないことを考えると、田植えは図絵Bが描かれた後に行われた可能性が考えられよう。津軽の農書のうち、安永5年（1776）に著された『耕作晰』（稲見 1977）や宝暦から天明期にかけて成立したと考えられる『津軽農書 案山子物語』（浪川 1994）は真澄が雪形を見た頃にも利用されていた農書と考えられるが、それらでは田植えの目安は雑節の「入梅」とされている。寛政8年の入梅は5月7日であり、図絵Bが描かれた6日後、真澄が駒込を去った4日後である。雪形を気にしながらも実際の田植えは入梅の頃に行われたと考えても矛盾はない。

V 青森市内における現代の雪形認識

(1) 概況

前節で見たように、真澄の記録した三種の雪形は現代においても同じように見ることができものであるが、本節ではそれを現代の人がどのように捉えているかについて述べてみたい。

真澄が雪形を記録したのは現在の青森市東部の駒込地区であることを確認したが、雪形の見え方は同じ市域の中でも違いが見られる。駒込付近から見ると三種の雪形をほぼ正面から見ることになるが、市の西部から見ると雪形を斜め横から見るようになるため、形がわかりにくくなり、「種まきオッコ」は形として認識することは困難となる（図18右）。駒込よりさらに東側になると、隣の集落の戸山の手前付近では前岳が「牛の首」を隠すようになる（図18左）。さらに東側の戸山から戸崎、桑原付近になると、丘陵に遮られて八甲田山は見えなくなる（図13参照）。同じ市の東部でも、それらの丘陵から離れた原別、八重田では三種の雪形が見える。

以上のことから、調査は主に三種の雪形がよく見える青森市東部を中心に行った。

まず、雪形のことを知っているかどうかについてであるが、駒込地区においては後述するように、親や祖父母から聞いて雪形を知っている人を田や畑で複数確認することができた。それに対し、駒込の西隣の幸畑地区の水田では雪形を知る人を確認することができなかった。東隣の戸崎地区の水田では雪形を知る人はいたが、知識として知っているケースであった。⁽¹²⁾ 北側の古館地区の水田が埋め立てられたあとの畑や浜館の集落内では雪形を知る人を確認することはできなかったが、エリア的にはさ



【左】駒込より東側（青森市戸山）
→前岳で「牛の首」が隠れる
【右】駒込より西側（青森市細越）
→雪形を斜め横から見ることになる
→「種まきオッコ」は極細となる

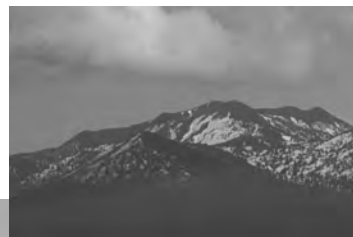


図 18 場所による雪形の見え方の違い（いずれも 2020 年 5 月 24 日筆者撮影）

らに聞き取りを行う必要も感じる。また、やや離れた北側の原別地区の水田では、親から聞いて雪形を知っているという人を確認することができた。

こうして見ると、筆者の聞き取りで雪形の話聞くことができた場所は駒込と原別であり、図らずも真澄が絵を描いた場所と重なる結果となった。

(2) 駒込地区における雪形認識

現在の字名としての駒込は八甲田山中までを含む広大な範囲であるが、駒込集落（図 13）は、八甲田連峰の前岳から 14 km、大岳から 17 km ほど北側に位置する。八甲田山の裾野と青森平野が接する付近で、標高は 14 m ほどである。駒込集落からみると、南南東方向 20 km 以内に見える八甲田山北斜面の雪形を望むことになる。なお、駒込集落からは西南西方向 44 km に青森県最高峰の岩木山（標高 1625 m）も遠望できる。以下の聞き取りは、2020 年、2021 年に、駒込の集落内及び集落に接する水田で行ったものである。

①昭和 29 年生まれ男性

(a 2020 年 5 月 26 日聞き取り)

雪形が見える位置にある水田で、田の畔よりをエンブリで均す作業中に以下の話を聞くことができた。

代々ここで田を作っており、雪形のことは父親やその上世代から聞いた。本などで知ったのではない。知っているのは「ガニ（蟹）のハサミ」で、それを農作業の目安としたと言われるが、具体的に何の作業と



図 19 2020 年 5 月 26 日の雪形と作業状況（筆者撮影）

いうことではない。

ウシの首や種蒔きオッコの話は聞かれなかったことからその点について尋ねると、それらについては知らないとのことであった。

なお、この水田からは岩木山も遠望できることから、岩木山の雪形を目安にすることはないかを尋ねたところ、岩木山も見えるが、特に目安には用いることはないとのことであった。

また、動植物を農作業の目安として用いることについて聞いたところ、ウツギの花を田植えの目安にした、コブシは田打ち桜といって田起こしの目安としたという話を聞くことができた。ただ、現在はそうしたことよりも、土日を優先する人が多いとのことであった。

(b 2021年5月18日聞き取り)

aの聞き取りから1年後、雪形が見える別の水田で作業をしているところに声をかけたところ、図らずもaと同じ人であった。何か所かで田を作っており、やめた人から借りて作っているところもあるとのことであった。前年に聞いた雪形に関連して田植え前後の作業について聞いたところ以下の話があった。

今年の作業もいつもどおり。今行っている作業はシロカキで使っている道具はエンブリ。昔は馬や牛も使ったが、それから耕運機が出てきた。

田起こしは連休に入る前にやらないとならない。土が乾いているうちに。水を入れる時期は品種にもよるが大体決まっている。5月5日に水があがるのでその前に水路を掃除し、田を打っておく。水は順番というわけでもない。

今は雪形など気にしない。植える時期に合わせて全部作業する。種をまいてから35日で田植えをするように、それに合わせて作業進めている。

苗は自分の家でハウスにビニルをかけて育てている。4月10日に種まきをしたので、それから35日で5月25日に田植えの予定。明日、明後日からちょこちょこやらなければ間に合わなく



図20 2021年5月18日の雪形と作業状況（筆者撮影）



図21 2021年5月26日の雪形と作業状況（筆者撮影）

なる。天気がよければ苗が伸びすぎるので。昔は手植えだが、今は機械で植える。サラリーマンと兼業の人は土日中心となる。田植えが終われば一段落で、植えてしまえば7割終わったようなもの。

以上の聞き取りから、実際の作業は具体的な何かを目安とするというよりも暦の日付や種まきからの経過日数が重視されていることがわかる。実際の田植えも予定どおりの5月25、26日に行っていた。

② 90歳前後?の女性（2020年5月26日聞き取り）

雪形が見える位置にある畑において、畑作業の休憩中に以下の話を聞くことができた。

田は作っておらず畑だけやっている。雪形のことは知っている。本などで知ったのではない。ここ（駒込）で生まれ育ったが、小さい頃からよく聞いたし、みんな知っていた。知っているのは「ガニのハサミ」と「ベゴ（牛）のツノ」。「ゴガツになればガニのハサミとベゴのツノ」とよく言われたものだ。具体的にそれが見えれば農作業がどうということでもない。今年は雪がよく残っていてまだ見える。

話を聞いた場所からは建物に遮られて八甲田山は見えていないにもかかわらず、その時の雪形の状況を的確に答えたことから考えると、雪形を農作業の目安として用いてはいなくても、雪形を気にしていることがうかがわれる。しかし、種まきオッコの雪形については聞いたことがないとのことであった。また、植物と農作業の関係についても知らないとのことである。

なお、「ゴガツになれば」の「ゴガツ」には注意を要する。話を聞いたのが現行暦の5月であったが、話の内容が昔のことであることからそれが旧暦の5月を指している可能性もある。しかし、これまでの民俗調査によれば、青森市東部においては田植えのことを「ゴガツ」ということが知られている（青森市史編集委員会民俗部会編1999他）。「ゴガツになればガニのハサミとベゴのツノ」というのは、本来的には、田植え時期とガニのハサミとベゴのツノの雪形が見える時期が重なるものであることを意味していたことも考えられる。

③ 昭和4年生まれ92歳女性（2020年6月8日聞き取り）

家の脇の畑において畑作業中に、八甲田の残雪の形と農作業の関係について話を聞いたところ知らないとのことだったが、例としてガニのハサミを挙げると、以下の話を聞くことができた。

ガニのハサミのことなら知っている。沢の深いところに残った雪だと聞いているが、特に農作業との関係がどうということは聞いていない。自分は筒井（駒込の北西）生まれだが、そちらでは聞いたことがなく、駒込に嫁にきてから聞いた。

ウシの角や種まきオッコについても尋ねたが、ガニのハサミ以外は聞いたことがないとのこと、

畑作物の種まきの目安について聞くと、白菜は8月1～5日頃、秋大根は15日頃にまく、のように全て現行暦の具体的な日付で答えが返ってきた。花との関係など自然暦的な目安は特に聞かないとのことであった。

④昭和8年生まれ男性（2020年6月13日聞き取り）

①bの水田近くの畑の周縁部の雑木を伐採中に以下の話を聞くことができた。

ガニのハサミとウシのツノを知っている。田植えの目安とした。見えてくるとそろそろかなと。どっちがどうという感じではなくセットで出るような印象があった。自分は駒込の住民だが、ここの昭和一桁生まれだとだいたい知っていると思う。

種まきオッコの話は出なかったことから尋ねてみたが、聞いたことはないとのことであったが、動植物を目安とすることはないかと尋ねたところ、カッコウを畑作物の種まきの目安とした。カッコウが鳴くようになれば霜がこないとのことであった。

⑤昭和37年生まれの男性（2021年5月18日聞き取り）

駒込と接する戸山地区の水田の作業を終え、脇の水路で道具洗い中に以下の話を聞くことができた。

雪形のことは知っている。ガニのツメとベゴ（牛）の残雪が見えれば田植え時と言っていたらしい。亡くなった父から聞いた。父は昭和13年生まれで70歳前に亡くなった。自分は長男で跡を継いだ。自宅は戸山。ガニのツメがあってベゴが横に寝そべっている。どっちがどうということではなく、同時に出る。天気がいい年は田植え前に消えてしまうこともある。

種まきオッコの話は聞かれなかったことからそれについてや、岩木山との関係、動植物との関係について尋ねたところでは、以下の話があった。

種まきオッコは聞いたことはある。しかし、後付けのようなものか。父から聞いたのはガニとベゴだけ。



図22 ⑤から望む2021年5月18日の岩木山

岩木山は女の人の顔が見えればどうのということも聞いたことがあるが、それは弘前の話。ここは岩木山も見えるが、遠いので目安にすることはない。

花や鳥との関係は聞いたことがない。うちはメインが畑で、ここの田は借りて食べる分だけ作っている。畑でもそういうことは何も言わない。今は暦に基づいて例年どおり行う。ビニールハウスなので、自分で

タネをまくのは日付で決めている。トマト、ピーマン、キュウリを栽培しているが、トマトは苗、ピーマンは種から育てる。自分で種をまくのはピーマンで、種をまくのは毎年3月10日と決めている。1日2日前後することはあるが。旧暦などは関係なく新暦の3月10日。農業は父の代からだ、父の代もそう。新暦で決めている。稲の種もみ浸けるのは彼岸の終わり、しめ彼岸の3月23日に浸けるとしていたが、田植えが早くなってきているので関係ない。大規模にやっている人は早く始めなければ間に合わない。種まきしてから35日ではというものの、日曜日でないと厳しい。特に人を頼んでいると日曜日となる。

⑥昭和23年生まれ男性（2021年5月18日聞き取り）

農作業中を終えて軽トラックで帰宅し、片付け作業中の人から以下の話を聞くことができた。

雪形は知っている。浜館（駒込の北側の集落）一帯は田んぼだった。そこから八甲田がよく見える。ウシの形が見えれば農作業をやる。田植えの頃で、5月中旬。田を掻いているところもあるし、起こして水を入れているところや、田植えをしているところもある。



図23 ⑥の山つつじ

あれが角で、右が体で、寝そべっているとか（実際の雪形を見ながら）。子供のころから今頃になれば、そういう話を聞いた。ずっと駒込に住んでいる。親の代、その親の代も。父親は大正10年生まれ。親の代、祖母の代からそう聞いている。駒込は田んぼよりも畑が多かった。ウチは両方やっている。5～6反歩。

他の雪形の話がなかったことから、ガニのツメと種まきオッコのことを尋ねたところ、ガニのツメは「ああ」と思い出した感じだったが、種まきオッコについては知らないようであった。

その他、動植物を目安にしていることはないか尋ねると、アカシアの花が咲けば山に行きタケノコ（ネマガリタケ）を採るという話があった。話の最中にちょうどカッコウの鳴き声が聞こえたことから、カッコウについても尋ねたところ、カッコウが鳴けばどうとかというのは聞いたことはあるが、具体的にはわからないとのことであった。

また、庭に山つつじが咲いていたことから、その点についても尋ねると、田代、ホウキ場方面（いずれも八甲田山中）から持ってきたもの。田代の人からもらったとのことであった。山つつじについては真澄の記録と重なるものであり、今も昔も雪形と重なる時期に咲く花であることがわかるが、その時期は現代と比較すると近世の方が遅いようである。

(3) 原別地区における雪形認識

原別は駒込の北北東約5kmに位置し（図13）、八甲田連峰の前岳から18km、大岳から21kmほ

ど北側に離れる。比較的海に近いこともあり標高は約5mである。駒込より東側から八甲田山を望むことにはなるが、雪形の見え方に大きな違いはない。住宅地の南側に広がる水田で2021年に話を聞くことができた。

①60歳代と思われる男性（2021年5月22日聞き取り）

八甲田山が見える水田において機械による田植え作業が一段落して休憩中に以下の話を聞くことができた。

ガニのツメは聞いたことがある。昭和8年生まれ之母から聞いた。具体的に何の作業の目安ということではないが、山の雪の残り具合は時々見る。他は知らない。



図24 2021年5月22日の雪形と作業状況

ウシや種まきオッコの雪形については知らないようであったが、作業の目安については以下の話があった。

田植えから逆算して作業の日程を決める。まくのは3月20日（彼岸が目安かと聞くと、そういえばそうかという感じ。むしろ日付）。あとの作業は土日というように曜日中心。旧暦も関係ない。雨でもやる。稲の育ち

具合で多少の調整はする。畑もあるが自家消費程度。まく時期などあまり細かいことは気にしていない。

(4) その他

「種まきオッコ」については八甲田山の雪形の例としてしばしば引用されながらも、筆者の聞き取りの範囲においては全く聞くことができなかったが、他者の聞き取りでも同様である。

村上義千代によれば、青森市矢田の85歳（取材当時）の女性からの聞き取りとして、「5月の節句に田でコピル（おやつ）を食べていたら、マンガ（代かきの道具）、牛、カニのはさみが山にさらわれていって雪形になった、と聞かされたもの。だから、節句に田をかけば駄目だ、と言われたものだ」という話と、その弟（取材当時78歳）からの聞き取りとして、「前岳の左斜面に棒のように残る雪形はサヘボ（代かきの馬を誘導する棒）といわれる。『田植えのころにカニのはさみ、牛首、マンガ、サヘボが出る』と言われ、農作業の目安にしてきた。カニのはさみの状態を見て、農業用水が多いか少ないか、を気にしたものだ」という話を紹介しながら、その二人とも「種まきおっこの雪形については聞いたことがない」と言っていたことを確認している（村上1999）。

村上の聞き取りでは「マンガ」や「サヘボ」といった筆者の聞き取りや、他の記録では確認することができない雪形も採録されている一方、「蟹の鉗」と「牛の首」の雪形が見え、「種まきオッコ」は誰も知らないという点においては駒込との共通点が見られる。

表4 雪形に関する聞き取り結果

地区	No.	種まきオッコ	牛の首	蟹の鋏	動植物の目安
駒込	①	—	—	ガニのハサミ	ウツギと田植え、コブシと田打ち
	②	—	ペゴのツノ	ガニのハサミ	—
	③	—	—	ガニのハサミ	—
	④	—	ウシのツノ	ガニのハサミ	カッコウと種まき
	⑤	—	ペゴ	ガニのツメ	—
	⑥	—	ウシ	ガニのツメ	アカシアとタケノコ
原別	⑦	—	—	ガニのツメ	—

結果として、「種まきオッコ」は真澄の図絵を手掛かりに現代においても認識できるものではあるものの、聞き取り結果に見る限り、地元を知る人はいないことになる。雪形としての伝承はかなり早い段階で消滅していたと見ることもできよう。

IVに示した雪形変化の観察結果からもわかるように、「種まきオッコ」は、その出現順や、農作業との対応関係において、既に真澄の聞き書き段階において正確さを欠くものであった。定着しなかった雪形である可能性も考えられるものであるが、真澄の記録を柳田国男が紹介し、それをさらに宮本常一らが引用したことで民俗学関係者の中で知られるようになった。⁽¹⁵⁾ 地元では全く無名な「種まきオッコ」の雪形が、むしろ全国的には有名になったのはそうした背景があった。そして田淵行男、室谷洋司らにより、「蟹の鋏」、「牛の首」とともに紹介され、一般にも広く知られるところとなったと見ることができる。

室谷はまた、「津軽雪形行脚」において雪解けが進行して「蟹の鋏」と「牛の首」が崩れると、「今どきの人々は「Y・Z」と見立て、初夏の兆候としている」とも記し（室谷 1981）、その後も「Y・Z」を紹介している（室谷 1999a 他）。それらは当然のことながらアルファベットが普及してから出て来たものであり、現代の雪形認識においては、新たな見立てが進んでいることを示している。

筆者の聞き取りにおいても親から直接聞いた雪形の他に、何かしらの媒体を通じて知ったと思われる雪形の話を含むケースがある（V-(1) 及び註（11）参照）。現在の雪形認識を調査する際には、そうした近年の新たな見立てによる雪形が含まれていたり、本などの媒体を通じて得た雪形情報を含んでいたりする場合があることにも注意する必要がある。

雪形に関する聞き取り調査の結果は、総数や母数の問題はあるにしろ、駒込地区でよく伝承されていることがわかった。雪形のことを話す人はいずれも親や祖父母から聞いたと話しており、ウシやカニについては呼び方の相違は見られるが、18世紀に真澄が記録した雪形が同じ駒込地区で伝承されてきたと見ることもできよう。

真澄の記録した三種の雪形は、「蟹の鋏」については雪形を知る人は全員知っていたのに対し、「牛の首」は知る人、知らない人に分かれ、「種まきオッコ」については知る人は皆無であった（表4参照）。呼び方としては、カニがガニとなり、「蟹の鋏」がガニのツメという言い方になることや、ウシがペゴという言い方になることは津軽地方では一般的なことであり、真澄の頃からそうした表現はあったものと思われる。⁽¹⁶⁾

まとめ

菅江真澄の『すみかの山』を詳細に検討したところ、真澄は寛政8年4月18日に駒込（現青森市）の阿保家で雪形の話聞いた可能性が高く、同21日過ぎ頃、同市原別から八重田付近で図絵Aの雪形の絵を描き、同年5月1日に再び駒込に向かった際に、集落に入る手前で図絵Bの雪形の絵を描いたものと推定することができた。

真澄の聞き書きによれば、苗代をまく頃に「種まきオッコ」が立ち姿をして現れ、「蟹の鋏」が見える頃に田を掻き均し、「牛の首」が見える頃に早苗を採って植えるとのことであった。図絵A、図絵Bともに三種の雪形が見え、前者には苗代の様子も描かれていることから、「牛の首」も現れて田植えが始まる頃の様子が描写されたとも受け取れる図絵である。しかし、描いた場所と日を推定し、それを現行暦に置き換えて実景と対比すると、真澄が描いた三種の雪形は、現在においてもほぼ同時期に同様に見ることはできるものの、実際には、最初に「蟹の鋏」と「牛の首」がほぼ同時に表れて長期間存続し、「種まきオッコ」は最後に現れて最も早く消えることがわかった。雪形の出現順については真澄の記載と整合性がないことになる。駒込への滞在期間を考えると、雪形の変化と農作業の対応関係の経過を真澄が全て見届けたとは考え難いことから、雪形と農作業との対応関係の齟齬は既に伝聞の段階にあったものと考えられる。

また、図絵Bの絵が描かれた時期を対比すると、現代においては既に「種まきオッコ」が消失している時期であった。現在の方が融雪の進行が若干早いことと、雪形の形成と消失には今も昔も年毎の遅速はあっても、相対的な出現順や農作業の手順については近世も現代も変わりがないことを考えると、真澄が話を聞いた時点で既に雪形の出現順や、農作業との対応関係に混乱があったことがわかる。

筆者が聞き取り調査を行ったところでは、親や祖父母から聞いて雪形のことを知っているという人は駒込集落に比較的多く確認できた。ただ、駒込においても「蟹の鋏」と「牛の首」については知っていても、「種まきオッコ」を知る人は皆無であった。また、農作業の目安としては田植えの頃という程度の認識で、具体的な作業と雪形を結び付けて語る人はいなかった。

真澄が聞き取りを行った頃、雪形と農作業の具体的関係性は語られてはいたものの、必ずしも実態に即したものではなかった。近世においても、雪形は田植えの頃という大枠の目安としては機能していたものの、具体的な作業の目安としての期待は大きなものではなかったと考えられる。

一方、駒込地区においては雪形を作業時期の目安とする必要が全くない現代においても雪形が伝存していたことになる。具体的な作業の目安とされることはなくても、雪形は田植えの頃という大枠の目安としては機能し、田植えの時期には意識される存在であり続けた。

真澄の頃も現在も、田植えの頃には変わらず雪形が望見されていたのは、作業の具体的な目安というよりも田植え期の水が担保されていることの確認の意味もあったと思われる。駒込集落の水田を潤す駒込川は、遡ると雪形にたどり着く。雪形は山腹に可視化された水源でもあった。

駒込や原別など、八甲田山北麓においては、表現に多少の差がありながらも「蟹の鋏」、「牛の首」といった、多くの人で共通認識できる雪形があり、それらは具体的な作業の目安とはされないまでも、今も昔も田植えの頃の心づもりを促す存在であり、水源確保の安心感につながる存在であったと

見ることもできよう。

なお、ここまでの雪形の検討を通じてもう一つ見えてきたことがある。真澄の記録の科学性に光を当てたのは内田武志の研究をサポートした妹の内田ハチであるが（内田ハチ 2017）、一連の雪形に関する記録にも真澄の科学的な姿勢を垣間見た思いがする。「書写者は図絵五十九葉を克明に描いてくれたが、あまり上手なひとではなかった」（内田・宮本 1967）、「あまり丁寧な模写とは言えない」（内田・宮本 1972）と評される写本ではあるが、その拙いとされる模写にさえ真澄の姿勢はトレースされていたのである。

石井正己は真澄を「尾張（愛知県西部）で最新の本草学を学んだ真澄は自然と人間の関係を深く見詰め、総合科学としてのナチュラルヒストリー（自然史、博物史）の視点を持っていたと言っている」と喝破し、「個々の図絵の丁寧な読み解きを通して、私たちはそうした認識を深めることができるにちがいない」とする（石井 2023）。『すみかの山』にも多くの図絵があり、文や挿入された歌から動植物の様子も伝わる。本稿では雪形を中心にまとめたが、そうした動植物の様子をも重ねて複眼的に見ると、当時の気象を知るこの上ない資料となる可能性を秘めていることも指摘しておきたい。

註

- （1） 真澄の記載には「種蒔翁」、「種蒔老翁」などとあるが、読みとして「オッコ」の記載もある。翻刻の際にはそのままの字を起こしたが、筆者の本文中では便宜的に「種まきオッコ」に統一した。同様に「蟹のはさみ」などは「蟹の鋏」に「牛のクビ」などは「牛の首」に統一した。
- （2） 「雪形」の語が用いられた事実上の初例は中山太郎の『日本民俗学論考』（中山 1933）と思われる。『津軽口碑集』にある事例を紹介する中で用いられたのであるが、引用元には「雪形」の語はなく、中山も使用意図を明確にしていない。昭和 10 年代には新潟県において「雪形」が使用されていたとの報告もあるが（山崎 2000）、明確な意図をもって「雪形」を使用し、その説明を行ったのは岩科小一郎の「山村語彙」（岩科 1943）と思われる。それ以降山岳関係者の間で広まり、田淵行男の『山の紋章 雪形』（田淵 1981）を機に一般に周知が進んだと考えられる。
- （3） 内容的に雪形に関することと判断される記録は、宝永元年（1704）刊行の句空の句集『干綱集巻之四』（句空 1704）に見える富山県僧ヶ岳の例まで遡ることができる。青森県域においても菅江真澄以前に、工藤白竜による『津軽俗説撰後拾遺』に岩木山の事例が触れられている。農書も各地に残されているが、近世から雪形の記録が残る津軽地方においても元禄 11 年（1698）に著された『耕作口伝書』以来、『耕作晰』、『津軽農書 案山子物語』、『津軽俗説撰後拾遺』に採録された「芦沼の宗四郎の農書」などが残されている。津軽地方は近世に雪形の記録が残される地域において複数の農書も残されているが、農書には雪形に関する記載は見られない。
- （4） 真澄の著作の題の多くは万葉仮名で記されており、『すみかの山』も写本の題簽に「栖家能山」とあり、「すみかのやま」と読む。1960 年代から平凡社によって刊行された『菅江真澄遊覧記』のシリーズにおいては「すみかの山」のごとく、万葉仮名部分をひらがなとしたかな漢字交じり表記とされたが、1970 年代から未来社によって刊行された『菅江真澄全集』のシリーズにおいては、目次やタイトル部分には万葉仮名にルビを振っているものの、かな表記で書名を表している。真澄研究においては、前者のかな漢字交じり表記を「通行体」として用いるケースが多いことから、本稿においてもそれに倣った表記とした。
- （5） 消え残った残雪の白い部分を何らかの形に見立てたものをボジの雪形、残雪に囲まれた雪が消えた山肌部分を何らかの形に見立てたものをネガの雪形と呼ぶことが多い。
- （6） 現在の八重田は市街化が進んでおり、目視で確認できる部分はあるものの、ほどよい構図で写真を撮ることができないことから、比較的近い光景を望むことができた小柳からの写真を掲載した。

- (7) 真澄は5月1日の朝、「霍公鳥きかばや」ということで堤川を渡って茶屋町、松森、古館を経て駒込に入り阿保家についてほどなく雨が降った。翌2日は、「空のくもりたり、雨ならん、けふ斗はとあるじにとゞめられて」と記している。1日は早い時間に阿保家に入ったとは考え難いにもかかわらず、翌日にはそそくさと出発しようとして主に留められている。そのやり取りからは阿保家に入る前には既に目的を達していた様子うかがわれる。駒込に入る際も、古館からそのまま直進すると駒込に着くにもかかわらず、あえて浜館方向に迂回し、駒込の集落越しに雪形の絵を描いているのは、そこに大きな目的があったからこそとも受け止められる。前回の駒込滞在で阿保氏から雪形の話聞いていたものの、駒込から実見することはできていなかったことから、雪形の絵を描くことを目的に再度駒込を訪れたとも考えられよう。「霍公鳥きかばや」には、田植え時の季節感を味わいたいとの含意もあり、雪形はその季節感に連なるものでもある。2日の本文には雪形と農作業の具体的な関係が記されているが、1日、駒込に入る前に雪形を描き、その夜阿保氏からさらに具体的な雪形の話聞き、それを2日の文中に表したと推定される。
- (8) 「紀行「すみかの山」と菅江真澄の魅力」(深澤2014)と『菅江真澄、旅のまなざし』(秋田県立博物館2014)には、深澤氏が撮影した同一と思われる八甲田山の雪形の写真が載るが、前者の撮影日が今年(2013年か)6月3日、後者の撮影日が2002年5月9日と一致しない。
- (9) 2020年は記録的な少雪で青森市内の融雪も早かった。一転して2021年は多雪であったが、融雪の進行は前年より早く、市内でも3月中旬には雪がなくなり、八甲田山では前年よりも早く積雪ゼロとなった。こうした年による積雪量や融雪の変化はあるが、三種の雪形の見え方は大きく異なるものではなかった。
- (10) 図絵Aが描かれた場所は原別と推定したが、比較に用いた写真は図絵Bが描かれた付近の駒込から撮影したものである。天候の関係もあり、5月27日とは1日違いとなったが、2年とも同じ日で撮影ができた5月26日で比較を行った。
- (11) 図絵Bが描かれた場所は駒込と推定したが、比較に用いた写真は駒込から3km程北西の松原から撮影したものである。日付は同じ6月6日でそろえることができた。
- (12) 残雪がY、Zの形に見えるという話は知っているが、農作業とは関係ないとのことであった。
- (13) 5月2日(現行暦の6月7日)の条に、宮崎(駒込)では家ごとに軒の高さほどもある赤白黄色のつつじが咲いているが、それは耕田山(八甲田山)から10年ほど前に根ごと掘ってきたものでこの家でもよく茂っている旨の記載がある。ここの山つつじも同じように八甲田山中から移植したものとのことであり、色や高さも相応のものであった。ここも含め、同様のつつじは真澄の宿泊先周辺に今も少なからずあり、雪形が見られる頃に咲いていた。
- (14) 村上は、「八甲田の雪形を知っているという今カセさん(85)を青森市矢田の自宅に訪ねた」として雪形の話を紹介しているが、青森市東部に位置する矢田地区からは、前景の丘陵に遮られて八甲田山を望むことはできない。自宅が矢田で、田は異なる地区に所在するのか、あるいは「矢田前」や「八重田」の類似した呼称の地名の誤りかとも考えられるが未確認である。ちなみに、八重田は真澄が図絵Aの下半部を描いたと推定される場所であり、矢田前はその東隣である。どちらも真澄が図絵Aと図絵Bを描いた場所の間にあり、雪形を望むことができる場所である。
- (15) 柳田国男は『分類農村語彙』において菅江真澄の『栖家の山』からひいて「タネマキオツコ」を紹介している。
- (16) 写本の文中には、「蟹の銚あるはいふがにのはさみ」(図4参照)とあるが、内田らの翻刻では「蟹の銚、あるはいふ、かにのはさみ」(内田・宮本1972)とある(傍点筆者)。また、写本の文中に「蟹銚(かにはさみ) 牛首(ウスクビ)」(図6参照)とあるが、内田らの翻刻では「蟹銚(かにはさみ)、牛首(ウシクビ)」(内田・宮本1972)とある。内田は解題において「本文にも誤字がみられ、特に清濁音、いとえの誤写などが少なくなかったが、それらは編集に随って訂正しておいた」(傍点内田)とする。後者の「ウス」は、書写者の訛りが文字に表されたと思われることから訂正は妥当なものであろうが、前者については、真澄の聞き取りでは「ガニ」もあったことから、あえて二つの言い方を併記したものと思われ、濁点を外して「カニ」としたのは編集の行き過ぎとも思われる。

引用文献

- 青森県立図書館 青森県叢書刊行会編 1951 『青森県叢書 津軽俗説撰』 青森県学校図書館協議会
- 青森市史編集委員会民俗部会編 1999 『矢田・宮田・滝沢の民俗』 青森市史叢書 1 民俗調査報告書第一集
- 秋田県立博物館 2014 『菅江真澄、旅のまなざし』 秋田県立博物館
- 秋田叢書刊行会編 1933 「栖家の山」『秋田叢書別集 菅江真澄集第六』 秋田叢書刊行会
- 石井正己 2023 『菅江真澄 図絵の旅』 角川ソフィア文庫
- 稲見五郎校注・中村喜時著 1977 「耕作晰」『耕作晰・奥民図彙・老農置土産並に添日記・菜種作り方取立ヶ条書・除稲虫之法』 日本農書全集 1 農山漁村文化協会
- 岩科小一郎 1943 「山岳語彙」『登山講座』5 山と溪谷社
- 内田邦彦 1929 『津軽口碑集』 郷土研究社
- 内田武志 1967 『菅江真澄遊覧記』3 東洋文庫 82 平凡社
- 内田武志・宮本常一 1971 『菅江真澄全集』1 未来社
- 内田武志・宮本常一 1971 『菅江真澄全集』2 未来社
- 内田武志・宮本常一 1972 『菅江真澄全集』3 未来社
- 内田武志・宮本常一 1973 『菅江真澄全集』4 未来社
- 内田武志・宮本常一 1974 『菅江真澄全集』10 未来社
- 内田武志・宮本常一 1981 『菅江真澄全集』12 未来社
- 内田ハチ著・野呂昭編 2017 『菅江真澄に見られる科学的記録——内田ハチ遺稿集』
- 太田原潤 2021 「菅江真澄『栖家能山』にみる雪形——近世と現代の対比から」『日本民俗学会第73回年会横浜研究発表要旨集』 日本民俗学会第73回年会実行委員会
- 工藤白竜著・青森県立図書館・青森県叢書刊行会編 1951 『青森県叢書 津軽俗説撰』 青森県学校図書館協議会
- 田淵行男 1981 『山の紋章 雪形』 学習研究社
- 中塚武監修 2020 『近世の列島を俯瞰する——南から北へ』 気候変動から読みなおす日本史 6 臨川書店
- 浪川健治校注 1994 「津軽農書 案山子物語」『津軽農書 案山子物語・農業心得記・やせかまど』 日本農書全集 36 地域農書 1 農山漁村文化協会
- 野本寛一 2021 『自然暦と環境口誦の世界』 大河書房
- 深澤恭仁 2014 「紀行「すみかの山」と菅江真澄の魅力」『東奥文化』85 青森県文化財保護協会
- 宮本常一 1942 『民間暦』 六人社
- 村上義千代 1999 「前岳」『あおり 110 山』 東奥日報社（原著は1999年3月27日付『東奥日報』朝刊）
- 室谷洋司 1981 「津軽雪形行脚」『山の紋章 雪形』 学習研究社
- 室谷洋司 1999a 「青森県八甲田山の雪形」『ゆきのまち通信』63
- 室谷洋司 1999b 「青森県岩木山の雪形」『ゆきのまち通信』64
- 室谷洋司 2002 「八甲田の白馬が教える」『あおり草子 特集続青森雪譜』137
- 室谷洋司 2006 「ふるさと雪形探訪Ⅱ 青森県の雪形（2）三方から眺めた八甲田山の雪形伝承」『やぶなべ会報』19
- 室谷洋司 2011 「八甲田山の雪形推移と生物季節への活用」『やぶなべ会報』30
- 柳田国男 1937 『分類農村語彙』 信濃教育會
- 山崎進 2000 「新潟県魚沼地方の雪形（1）」『長岡市立科学博物館研究報告』35

引用オンライン画像

秋田県立博物館デジタルアーカイブ「栖家の山」

<https://da.apl.pref.akita.jp/mus/item/00010002/ref-C-21>

大館市立図書館 Web 「錦木」菅江真澄著作集 <http://lib-odate.jp/sugae/sugae-pdf/m5-8.pdf>